

そよかぜ

第74号

地方独立行政法人 神戸市民病院機構

神戸市立 西神戸医療センターの基本理念

**神戸西地域に根づいた
安心・安全な医療をめざします**

発行日／令和 7 年 8 月

編集人／鴨川課長

<https://nmc.kcho.jp/>



神戸市立西神戸医療センター事務局長の桑村です。いつも当院の運営にご協力いただき、誠にありがとうございます。

当院は、昨年度開院30年を迎え、神戸西地域の中核病院として安全・安心な医療の提供とともに、患者さんへのサービス向上に取り組んできました。

これまで、診療費の自動精算機や採血採尿自動受付機の導入、医療費後払いシステムの導入、マイナ保険証への対応、駐車料金サービスの充実などのほか、地元アパレルブランドと連携した、新生児との記念撮影のためのフォトブース設置や肌着一体型ベビー服導入などを進めてきました。

また、今年度中を目途に電子カルテシステムの更新に取り組んでおり、その際には、皆さまからご意見が多く寄せられている待ち時間対策の一環として、患者さんのスマートフォンにアプリを入れていただくことで、プッシュ型通知により、診察の呼び出しや予約日のリマインドなどを行う「通院支援アプリ」を新たに導入する予定としています。そのほか、次年度以降になりますが、手術室や外来診察室増設も予定しています。

引き続き、患者さんのご意見に耳を傾け、より良いサービスがお届けできるよう取り組んでいきますので、これからもどうぞよろしくお願いいたします。



事務局長

桑村 佳孝

神戸市立西神戸医療センター

〒651-2273 神戸市西区糺台5丁目7番地1 TEL : 078-997-2200(代表)

食中毒から身を守る3つの原則

～家庭で出来るかんたん予防～

気温や湿度が高くなる季節は、細菌が繁殖しやすく、食中毒が発生しやすい時期です。家庭でも、ちょっとした油断から食中毒が起きることがあります。今回は、「菌をつけない・増やさない・やっつける」食中毒の3原則のお話です。身近な行動から、食中毒を防ぎましょう。



原則1 ▶ 菌をつけない

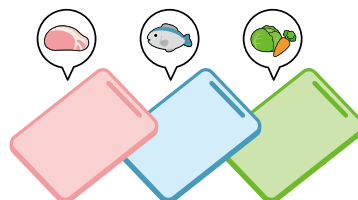
こまめな手洗いが基本！



- 調理前や食事の前、トイレの後は、石けんでしっかり手を洗いましょう
- スマートフォンは意外と汚れています。「スマホの表面には便座より多くの菌が付いていた」という報告も。調理中や食事に触らないようにしましょう。トイレへ持ち込まないことも大切です。

<調理中の注意点>

- まな板や包丁は、肉・魚・野菜で使い分ける
- 加熱前の肉や魚を触ったら、必ず手を洗う
- 焼く用の tong や箸は、食事には使わない
- 生野菜や果物はよく洗ってから使う



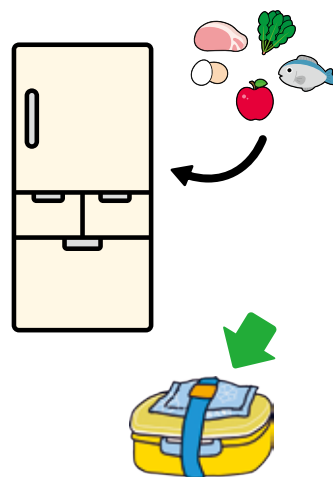
原則2 ▶ 菌を増やさない

時間との勝負！温度管理がカギです！

- 買った生鮮食品はすぐに冷蔵庫や冷凍庫へ
- テイクアウトや出前は、すぐに食べる
- カレーや煮物などの作り置きは、食べる前にしっかり再加熱を！

<お弁当に関する注意点>

- 水分の多いおかずは傷みやすいため注意。入れる場合は水気をよく切り、食品カップなどで仕切る
- 作ったあとは、冷ましてから蓋をする
- 冷蔵保存を心がけ、持ち運ぶ際は保冷剤を使用する。冷気は上から下へ流れるため、保冷剤は容器の上に置くと効果的
- 梅干しは抗菌作用があるが、接触している面にしか効果がないため、つぶしてご飯やおかずと混ぜると効果が広がる



原則3 ▶ 菌をやっつける

しっかり加熱・しっかり消毒！

- 肉や魚、二枚貝は中心まで十分に火を通しましょう
- 調理器具やふきんなどは、洗剤と流水でよく洗い、必要に応じて消毒を
- スポンジやふきんは雑菌が繁殖しやすいため、定期的に交換しましょう



正しい知識とちょっとした工夫で、食中毒を防ぐことができます。

安心して食事を楽しむために、日々の中で出来ることから取り入れてみてください。

緩和ケアチーム

緩和ケアセンター 安藤俊弘／中村真理／正井志穂／長野淑恵

緩和ケアチームは、がんや心臓・肺の病気などによって感じられる身体の痛みや息苦しさ、不安や眠れないといった“つらさ”に寄り添い、患者さんとご家族がその人らしい毎日を穏やかに過ごせるように支える専門チームです。医師、看護師、薬剤師、管理栄養士、臨床心理士、ソーシャルワーカー、理学療法士、作業療法士などが一丸となって、治療と同時に不安を和らげるサポートを心がけています。

チームの関わりは、がんと診断されたその日から始まります。診断のショックや治療の副作用があっても、「つらさを我慢せず、いつでも相談できる場」があることで、安心して治療に向き合えるようになります。身体的な痛みや息苦しさの緩和はもちろん、「夜眠れない」「心が落ち着かない」といった心の声にも耳を傾け、患者さんの気持ちを和らげることを大切にしています。

また、ご家族の気がかりやつらさにも対応します。治療中の患者さんへの対応、ご家族自身の気持ちのつらさや、介護の悩み、今後の生活や社会制度について、それぞれの専門職が丁寧にサポートします。ご家族の心が少しでも軽くなると、それは患者さんご本人の力にもつながると思われま

す。当院では2021年4月に「緩和ケアセンター」を開設し、早期からの緩和ケアを受けられる体制を整えています。入院中だけでなく、外来でも専門スタッフによる相談やサポートを受けられる体制になっています。入院中は回診やミーティングで各職種が情報を共有し、外来では緩和ケア担当の看護師や医師が相談に対応いたします。さらに、当院では定期的につらさのスクリーニングシートを用いて、体のつらさや気持ちのつらさに早期に気づけるようにしています。スクリーニングの結果をもとに、迅速なケアができるようチームが連携して動いています。



🌸 周産期センター Instagram のご紹介 🌸

当院周産期センターが Instagram を開始しました！
周産期センターの紹介や当院開催のイベント情報などを随時掲載予定です。
ぜひフォローをよろしくお願いいたします 🍀

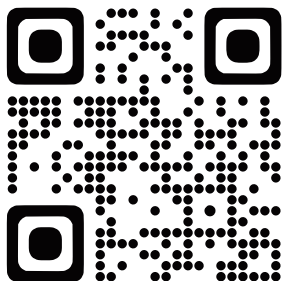


Instagram のフォローはこちら

🔍 神戸市立西神戸医療センター 周産期センター
@nmc_obstetrics6e_kcho



産科ホームページはこちら



🔍 <https://nmc.kcho.jp/obstetrics>

- # 受診される方へ
- # 産科のご案内
- # 妊娠中のこと etc…



当院 SNS の運用方針、その他広報情報はこちら

🔍 <https://nmc.kcho.jp/nishikobe>

- # そよかぜバックナンバー
- # インタビュー企画「にしこうべ」etc…



救急科

ごあいさつ

救急科部長の蘆田です。

当院の救急科部長に就任して、約1年半が経過しました。この機会に、改めてごあいさつさせていただきます。当院は神戸市西部地域に根差した中核病院として、日々多くの救急患者さんを受け入れ、地域医療の一翼を担っています。年々増え続ける救急患者さんに対し、いかにして安心と納得のいく医療を提供できるか、スタッフ一同で力を尽くしております。

救急科の新たな体制について

うれしいお知らせがあります。

2025年7月より、念願の救急科専門医が常勤医として当院に着任しました。

白川 和宏先生です。

白川先生は、神戸市立中央市民病院にて救急科指導医の資格を取得され、さらに集中治療科専門医としての経験も持つ頼もしい医師です。

今後は白川先生を中心に、中央市民病院からローテートで来てくれる救急専攻医、そして当院で研鑽を積んだ研修医の精鋭たちとともに、地域の救急医療をより一層充実させてまいります。

脳神経外科医として

私は救急科部長であると同時に、現在も現役の脳神経外科医として診療・手術を行っております。

担当している業務の割合は、脳外科が約8割、救急科が約2割です。

脳外科では、脳腫瘍、脳卒中（脳出血・脳梗塞・くも膜下出血など）、頭部外傷といった疾患の診療・手術を行っていますが、中でも私は、『脳血管障害（＝脳卒中）』を専門としており、近隣の医療機関から多くの患者さんをご紹介いただいています。脳血管障害の治療は、大きく分けて以下の2つの方法があり、ひとつが**開頭手術（切る治療）**でもうひとつが**カテーテル手術（切らない治療）**です。私はもともと開頭手術が専門でしたが、11年前にカテーテル手術（脳血管内治療）の専門医資格を取得して以降、両方の手法を使い分けて日々治療を行っており、現在では、カテーテル手術の件数が開頭手術を上回るほどになっています。このように、切る手術と切らない手術の両方に精通していることが、私の強みです。患者さん一人ひとりにとって、どの方法が最適かを丁寧に判断し、わかりやすく説明したうえで治療にあたっています。お悩みのある方は、ぜひ当院の脳血管内治療外来にご相談ください。

皆さんは、「9月9日」が何の日かご存じでしょうか？

答えは「**救急の日**」です。

この日は、1982年に厚生労働省と消防庁が制定したもので、

「9（きゅう）9（きゅう）」＝「救急」の語呂合わせにちなんでいます。

日本人らしい覚えやすいネーミングですね。**毎年この**

日を含む1週間は「救急医療週間」とされ、全国各地で、AED（自動体外式除細動器）の使い方講習、応急手当の体験教室、救急車の見学・乗車体験などの啓発イベントが開催されます。また、緊急性が低い症状の際には、救急車を呼ぶのではなく**「#7119（救急安心センター事業）」**という電話相談窓口の活用が推奨されています。専門の看護師や医師が症状を聞いて、必要な対応を案内してくれます。

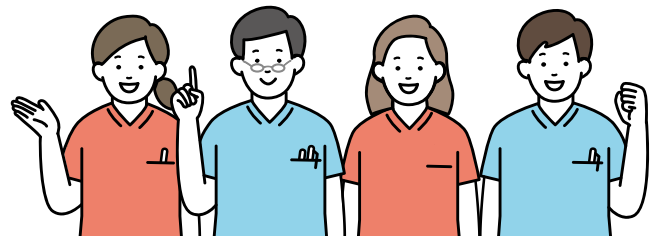


最後に

脳神経外科は、救急対応が必要な患者さんが非常に多い診療科です。

私自身が、脳神経外科医と救急科部長を兼務している強みを活かし、チームの力を結集して、地域の皆さまにより良い医療を提供できるよう努力してまいります。

今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。





小児科のご紹介



小児科部長 松原康策

令和6年8月に当院は開院30年を迎えました。神戸西地域の小児医療の現状を踏まえ、当院小児科の紹介をさせていただきます。

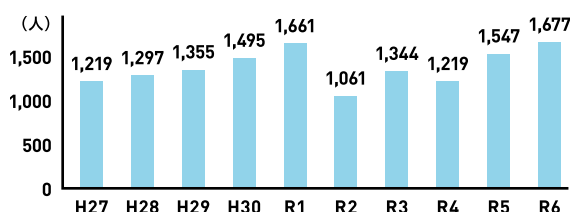
1. 神戸西地域の小児医療の現状

現在、神戸市西区・垂水区、および三木市に小児の入院できる施設が当院以外にありません。

また、時間外の小児救急の受け入れにおいては、上記の地域に加えて西播磨から北播磨までの広い範囲で応需困難になっています。当院はこれらの診療圏人口約60万人(時間外では70万人以上)の小児医療を守る砦として、小児科スタッフは「断らない小児科」をコンセプトに日ごろの診療にあたっています。

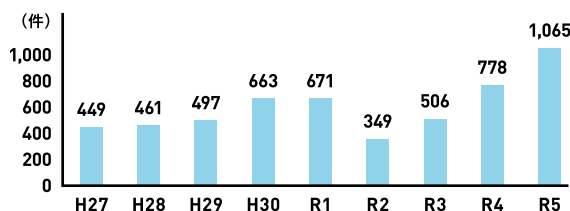
【ご紹介の患者さんの受け入れ】

平日のみならず時間外においても、ご紹介患者を全例受け入れています。平成27～令和6年にご紹介いただいた患者数を右に示します。コロナ禍で一旦減少しましたが、令和6年には開院以来最多の紹介患者数となりました。



【救急車の応需】

平成27～令和5年度の救急車の応需件数の推移を右に示します。令和5年度は1,000件を超え、開院以来最多の応需件数となりました。この期間の応需率は90%以上を維持しています。



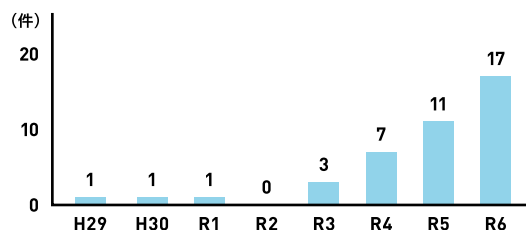
2. 特に力を入れている領域

1) 食物アレルギー

経口負荷試験は年間に約200例、延べ3,000例以上実施しています。食物経口負荷試験による結果をもとに、除去食の必要性や日常摂取できる食事量の相談、エピペンの必要性の判断を行っています。小児アレルギーエデュケーターの資格をもつ看護師も配置しています。最近のトピックスを二つ紹介します。

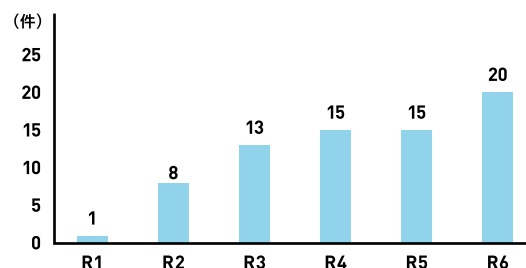
① クルミアレルギーの増加

「令和6年度 食物アレルギーに関連する食品表示に関する調査研究事業報告書」によると、即時型食物アレルギーの原因食物は、鶏卵(26.7%)についてクルミ(15.2%)が2位になりました。当院でもクルミ経口負荷試験件数が年々増加しています(右図)。ただし、クルミアレルギーがあるからといって、すべての木の実類を除去する必要はありません。採血や負荷試験を実施し、必要最低限の除去を、きめ細やかに指導することに努めています。



②卵黄による食物蛋白誘発胃腸症(FPIES)の増加

卵黄によるFPIESは、離乳食で卵黄を複数回摂取した後に発症することが多く、摂取後1～4時間で何度も嘔吐を繰り返すのが特徴です。一般的なアナフィラキシーとは異なり、嘔吐のみの症状が多く、蕁麻疹や咳は伴いません。FPIESは、2歳ごろまでに寛解することが多いですが、採血では診断や耐性獲得の確認ができず、負荷試験が必須となります。右図の通り、当院の卵黄経口負荷試験の件数は年々増加しています。



2) アレルギー性鼻炎

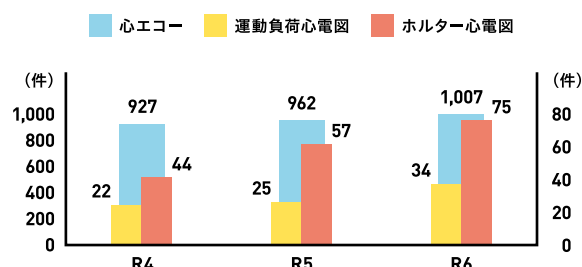
スギ花粉症やダニによる通年性アレルギー性鼻炎の患者(概ね5歳以上)を対象に、舌下免疫療法を積極的に導入しています。述べ400人以上に治療経験があります。

3) 小児神経領域

てんかん診療(約200名)、発達遅滞の原因検索、発達遅滞を合併する染色体異常や症候群の育児支援などを行っています。てんかん診療ではここ数年で新薬が登場し、情緒面や認知機能への影響の少ない薬剤を選択できる時代になりました。副作用が少なく患者さんの発達特性を考慮した薬剤選択を心がけています。乳幼児の発達遅滞については、頭部MRIも含めた検査に並行して発達状況を確認し、暦年齢と発達年齢の差が2か月を越えて開いていく場合は療育をご紹介します。療育開始後も時々受診していただき、成長に伴って生じてくる悩みの相談に乗っています。発達障害診療については他施設にお願いしている状況ですが、夜尿・遺尿、チックなどの診療は実施しています。

4) 小児循環器領域

先天性心疾患や不整脈などの診療にあたっています。令和6年度に実施した心エコー件数は1,007件、運動負荷検査は34件、ホルター心電図検査は75件で、**右図の通り近年増加傾向です**。また、産婦人科と連携し胎児心エコー検査を行っています。令和7年度から第2,4木曜日の午後に心臓外来2を増設し、より多くの患者さんの診療ができるようになりました。



5) 低身長

身体所見や成長曲線を基に、ホルモン検査や画像検査などのスクリーニング検査を実施しています。成長ホルモン負荷試験は入院で実施しています。**成長ホルモン**治療経験は60例以上にのぼり、対象疾患は、成長ホルモン分泌不全性低身長やSGA 低身長のみならず、ターナー症候群、ヌーナン症候群の遺伝性症候群、軟骨低形成症、成人性成長ホルモン分泌不全症などの経験も豊富です。

6) 未熟児フォロー

早産児や低出生体重児の**発育、発達をフォローします。当院で出生した児が主な対象です。**

抗がん剤を混ぜ合わせる薬剤師のご紹介



外来の化学療法センターのすぐ隣に、見えませんが、右の様なお部屋が設置されています。



これは、天井から無菌の空気が吹き込む機械です。中の空間は無菌になってます。



薬剤師が特殊な器具を用いて、患者さんに必要な量の抗がん剤を注射器で吸い取っている写真です。無菌的に行うことで、血管からの感染症の危険性も軽減しています。



最後に、大きな点滴バックに入れます

通常は3名の薬剤師が担当しています。

